

# 冬のライチョウ

山岳環境研究所 倉倉孝明

冬の真っ白なライチョウ、自然を愛し山に登っている人でしたら、誰もが一度は見てみたい、と憧れる存在ではないでしょうか。といっても、山のどこを探せばよいのでしょうか。

厳冬期のライチョウ調査を初めて実施したのは、爺ヶ岳における大町山岳博物館で、昭和41年(1966年)のことです。立山では、富山雷鳥研究会が(その前身の冬山ライチョウ研究会を含めて)昭和53年(1978年)からほぼ継続的に調査しています。しかし、ライチョウの冬期の生態はなかなかみえてきていません。日本の冬山の特徴は強風と豪雪です。厳しい環境故、調査がままならないためです。でも、近年よいフィールドが見つかりました。北アルプスの北東端に位置する白馬乗鞍岳周辺の山域です。白馬乗鞍岳では二通りの調査を実施してみました。一つは厳冬期の踏査で、とにかく山の中を歩き回ってライチョウを見つけよう、というものです。もう一つはライチョウの生態を利用したものです。冬期、ライチョウは雪穴の中で多くの時間を過ごします。その結果、雪穴の中にはお皿のような形にかたまった糞塊が残ります。この糞塊は、その後の降雪で雪に覆われて保存され、春の雪解けとともに表面に露出します。5月から6月初旬の残雪期にこの糞塊をみつけて、冬期ライチョウがどこを利用していたかを知ろうというものです。前者の調査は長野県小谷村、後者は環境省長野自然環境事務所グリーンワーカー事業の支援を得て、小谷村の山岳ガイドの人たちとともに実施しました。この二種類の調査を組み合わせ、白馬乗鞍岳周辺で冬期ライチョウがどこを利用しているかについては、ほぼわかってきました。



越冬地は白馬乗鞍岳を取り巻くように亜高山帯に点在していますが、北側はほとんど利用しないようです。標高は 1950m から 2150m くらいが多く、1900m 以下はごく希にしか利用しません。そこを巡ればほぼ確実にライチョウに出会うことができる、という利用頻度の高い地点が 5 ヶ所ほど見つかっています。いずれもほぼ同じ環境で、斜面の環境勾配に従い、上部からオオシラビソ林・ダケカンバ林・雪原と変化する中、オオシラビソ林縁部の疎林からダケカンバの疎林が越冬環境です。

冬期のライチョウは、餌資源が限定されるためでしょう、徹底した省エネ生活を送っているようです。一日の行動を再現してみると、日の出の少し前くらいにねぐらから昼間を過ごす場所(前記した環境)に出てきます。雪から斜めにつきだしたような、背の低いダケカンバの疎林で採食した後、近くのオオシラビソの疎林に移って木の根元に雪穴を掘り、たまに頭の上にあるオオシラビソの葉をついばんだりしますが、ほとんど動かなくなります。夕刻までそのまま、ダケカンバを食べてからねぐら入りする。こんな生活を繰り返しているようです。

他にもわかってきたこと・わからないことがあります、それは次の機会に。